

識別番号 L 1  
研究課題 バンテアイ・クデイ寺院から発掘された廃仏 274 体の比較研究  
研究代表者 石澤良昭 (アジア文化研究室)  
共同研究者 渡辺文夫 (教育学科) 菊井高昭 (経済学科) 村井吉敬 (アジア文化研究室)  
Cyril Veliath (アジア文化研究室) 中山淑 (電気・電子工学科)  
大久保成 (情報科学教育研究センター)  
Summary The Sophia University Angkor International Mission has collaborated with the Cambodian government in activities for the preservation, restoration, and research of the Angkor monuments since 1980. The Sophia Asia Center for Research and Human Development was established locally in 1996, for the training of Cambodian middle management technicians. Banteay Kdei is a ruined Buddhist temple, built at the end of the 12<sup>th</sup> century at a location about six kilometers north of Angkor Wat. Since 1991, the Mission has selected Banteay Kdei as a training site in excavation and building restoration, for Cambodian students of archaeology and architecture. The extensive grounds were used for such purposes for the decade up to March and August 2001, whereupon a group of excavators unexpectedly discovered 274 Buddhist statues buried within these grounds. Their discovery took place during a routine practice excavation for normal archaeological training.

#### <約 600 年の栄華の都城>

「アンコール文明」とは何か。それはカンボジア北西部の約 300 万 km<sup>2</sup>の広さ (東京都区内ほど) のところに集中展開した文明である。それはローマ文明と同様一日にして成ったのではない。9 世紀以降 26 名の王たちによって次々と都城が造営され、少なくとも 4 回にわたり黄金の大都城が栄華を極めていた。即位した王たる者は、王自身の手により新都城と新国家鎮護寺院と新王宮の 3 点セットを建設するよう求められていた。そうして 14 世紀まで建設された膨大な数の石造建築物が、アンコール遺跡として残存している。

#### <仏教徒王ジャヤヴァルマン 7 世>

ジャヤヴァルマン 7 世 (1181-1219 頃) の時代に建立されたバンテアイ・クデイ寺院において、上智大学アンコール遺跡国際調査団は 274 体の仏像を 2001 年に発掘した。アンコール王朝研究が始まって 140 年あまりになるが、このような大量の廃仏が発掘されたことはこれまでになかった。

この仏像の破壊は、理由なく起きたわけではない。また往時のクメール人たちが喜んで仏像を破壊したとは考えられない。このような命令をできるのは、王以外考えられない。背後には大きな思想的な変革や政治的意図があったと思われる。13 世紀後半にはヒンドゥー教を信奉する人たちが、おそらく王位継承権をめぐる内戦に突入したと思われるが、それにはすさまじいまでの暴力的破壊が伴っていた。この破壊には政治的背景からくる反仏教の憎しみがあった。かつての仏教寺院プリヤ・カーンな

どでは、石柱に刻まれた仏像が削り取られ、苦行僧の像が新しく彫られている。

#### <仏教徒ヒンドゥー教と王位継承権>

ジャヤヴァルマン 7 世は隣国との戦争に打ち勝ち版図を拡大した王であり、空前のアンコール王朝の栄華をつくり出した偉大な王である。その在位は 40 年間にわたり、その間は仏教優先策をとっていた。12 世紀前半までのアンコール王朝約 400 年の立国の思想はシヴァ派とヴィシュヌ派であった。それを証左するように、都城の中やその近隣を含めヒンドゥー教系の寺院が数多く建立されてきた。そのヒンドゥー教で固められたアンコールの地における仏教寺院の建立および仏教の聖地への衣替は、実際にはジャヤヴァルマン 7 世が強権を発動して推進した一種の宗教改革でもあったと思われる。

ジャヤヴァルマン 7 世の逝去後、政治事情の絡んだ宗教問題が起きた。1220 年頃登位したインドラヴァルマン 2 世（1220 頃～1243）は、断片的な史料や寺院改造跡から仏教徒もしくは仏教を容認していた王と思われる。したがって仏教が権勢を振るい主導権を握っていた期間は、ジャヤヴァルマン 7 世とインドラヴァルマン 2 世両王を併せると 60 年間ほどに及ぶ。

ところがその次に即位したジャヤヴァルマン 8 世（1243-1295）は、シヴァ神を篤信していたと思われる。その結果、この王の統治初期において反仏教運動が起こったのだろう。しかしながらシヴァ派勢力は仏教優位のジャヤヴァルマン 7 世時代後も存在し続け、活動していたと思われる。何が反仏教運動のきっかけであったのかははっきりしない。

#### <上智大学調査団の大発見>

発掘した 274 体の仏像は、ほとんどがナーガ（蛇神）に護られて禅定する仏陀であり、この様式の仏像が往時流行していたようである。これらの彫像はクメール美術では特に馴染みが深い。仏陀が涅槃の境地に入るための 7 週間にわたる禅定の間に、滝のような雨が 1 週間降り続いたことがあったという。その時、龍王ムチリンダが地の中から現われ、とぐろを巻き 7 つの頭を大きく広げて仏陀を守ったという。

このナーガ上の座仏は、最初は 10 世紀半ば頃に登場してきたが、当時のヒンドゥー教神像から図像的な影響を受けていたようである。発掘した廃仏の中には 12 世紀のアンコール・ワット時代の様式の髪型に類似したものがあり、ヒンドゥー図像の影響を受けていたのであろう。

今回の発掘は、アンコール王朝末期は疲弊するままに衰退したというフランス極東学院の通説を覆し、王朝末期にも廃仏を実行できるほどの強力な王権が存在したことを裏付ける史実の発掘となった。こうした大量の廃仏発見から言えることは、同時代の他の仏教遺跡であるプリヤ・カーンやタ・プロームなどにも、地中に廃仏が埋められている可能性が高いということである。この廃仏をめぐって、上智大学調査団は歴史・考古・美術・図像・建築などの諸学からアンコール史を新しく再構築する議論に先鞭をつけたがことになる。